令和２年度　行　事　総　括

本年は年始に中国で発生した新型コロナウイルスに振り回された一年でした。

日本でも緊急事態宣言が発令され、学校の休校や企業活動、外出、集会の抑制や自粛も行われました。今もその猛威は収まる事なく終息の兆しも見えていません。

世界中で６０００万人、日本でも１２月には２０万人が感染し、その影響は経済・医療・教育などの全ての分野に広がり、当紀南地域でもピリピリした状態が続いています。

こうした状況下でも我々の南奥駈道各山小屋の維持管理活動は続けていかなければならず、その活動への参加について「無理しないでください」と呼びかけをしていましたが、４９回の行事と延３６６名の皆さんの参加で、空白なく予定通り十分な活動が出来ましたことに厚く御礼申し上げます。

昨年の川島前代表の行仙補給路での急逝を受け、令和２年度は「無理しない」「安全第一」を念頭に置いた活動とする方針を掲げましたが、この一年間事故やトラブルが無かったことは皆さんのご理解があっての事と感謝しています。次年度も引き続きこの方針と新型コロナウイルスの対策を加えて行事計画を立案いたします。

以下に今年の主な行事を列挙します。

一、新型コロナウイルスの影響

四月七日～五月六日の間緊急事態宣言が出されました。この時期は全国の山好きにとって本格的に活動を開始する時であり、大型連休もあって一番賑わう時です。しかし緊急事態宣言の影響は大きく各小屋の予約や問い合わせは昨年比の十分の一位になりました。例年ゴールデンウィークには行仙、持経の小屋に会員の皆さんが交代で詰め、小屋利用者の対応に当たっていましたが、今年は初めて常駐する事も無く、閑散とした大型連休になりました。その後も第二波、第三波の発生で小屋宿泊者や日帰り登山者も激減しています。　秋には一時回復傾向が見られましたが、年間を通した小屋利用者は昨年の三分の一程度になりました。その結果宿泊料収入が減少、運営資金の不足が生じかけましたが、大口の御寄附（４０万円）や複数の方々からのご支援で何とかギリギリで赤字は回避できました。

感染の終息が見通せませんので、来年以降の活動も何らかの対応が求められる事になるでしょう。

二、大峰南奥駈道の全ルート・浦向道・前鬼金担ぎ坂の巡視

毎年春の大型連休迄に南奥駈の全ルート・山在峠～前鬼（50㎞）と浦向道についてチェーンソー持参で巡視を行っています。

今年も出動回数７回、延６９名の参加で完了しました。

昨年、今年と台風の直撃が無く、道の崩れはありませんでした。倒木も僅かで、チェーンソーの出番は少ないものの、参加された大半の皆さんは鎌や鋸を手に手入れされました。

道迷いのリスクを減らすため数カ所に道標を新設、現存の道標も更新しました。

玉岡相談役は常々地蔵岳のクサリ点検を気にかけられていますが、今年も春の巡視時に点検しました。今後も地蔵岳周辺のクサリ点検は重点事項として取り上げていきます。

三、新十二支会発足例会に参加・協賛（1/11,12　子ノ泊山）

十二支会は１９６０年に故今西錦司先生の提唱で第一回例会が当地、子ノ泊山で開催されて以降、５巡６０回、５０年に渡り開かれ、当ぐるーぷからも出席・協賛を続けて来ましたが会員の高齢化等によりいったん解散となりました。存続を望む声を受けて４１名の有志（当ぐるーぷからは１５名）が集まり新十二支会を立ち上げました。今年は第一回例会として子ノ泊登山を開催、関東から九州間の会員２７名が参加し、前夜祭も盛大に行われました。登山当日の子ノ泊山はあいにくの小雨で、山頂での滞在も短くなりましたが、新十二支会の発足を祝い、再会を祈って登山口に戻り閉会となりました。

我々は紀伊・熊野の端で生活していますが、大海を知らない新十二支会の会員の方々との交流は大変有意義なことでした。

四、靡看板設置を本格化

南奥駈道の四番吹越山から四〇番釈迦ヶ岳迄の靡に看板を設置する作業を本格化しました。四国は八八ヶ所、西国は三三ヶ所の札所（行場）がよく知られていますが、大峯七五靡（行場）は厳しい山域にあり、その場所が口伝えで伝えられてきたので、場所が特定できない或いは不明の靡も存在します。

一般登山者に靡の知識や興味は殆ど無く、行者さんでも素通りしてしまう行場もあります。我々の活動は登山道、小屋の維持管理にとどまらず、修行の道場として奥駈道本来の姿を後世に繋いでいく義務をも帯びています。一般登山者の増加に伴い、マナーに反する者も増えています。マナーの向上や啓発活動を一層加速する必要を感じます。

五、釈迦ヶ岳山頂・釈迦如来立像の光背修理

釈迦ヶ岳山頂の釈迦如来立像は大正一三年に「大阪佛立會」によって寄進・建立され、８２年後の平成１８年１１月に解体し製造元の株式会社大谷相模掾鋳造所（大阪市東成区）で修復され、翌平成１９年（２００７年）７月、山頂に再安置されました。今では大峯奥駈道のシンボル的存在になっています。今年１０月２５日、１９名が参加して釈迦ヶ岳山頂、都津門、深仙宿に靡看板を設置しましたが、その際釈迦如来立像の光背（輪光）が風で前後に揺れているのを見つけました。光背の最上部を留めているボルトが抜け落ちて、下から見てもボルト穴がはっきり判りました。このまま放置すると光背の折損や光背の下部が繋がっている頭部や背中に影響が及び、致命的な傷になることは必至です。早急にボルトを留めて修理する必要を強く感じ帰宅後五鬼助さんにも報告しました。

ハシゴや工具、安全対策、工法などの協議を行って１０月３０日７人で山頂に向かい修理を行いました。用意したステンレスのボルトで固定し、４０分で修理を終えヤレヤレと思いましたが、１１月２３日、またボルトが抜けている、との情報が入り、２日後の１１月２５日、３人で再修理に向かいました。１１月末の山頂（1800m）は気温も低く凍える指先を温めながらの作業でしたが、ステンレスのボルトを本来の真鍮製に取替、緩んでいたボルトも締め増しし、緩み止めも塗って可能な処置を施しました。

冬季は積雪があり、確認に行くことは難しいのですが、来春に再び修理が必要にならないように願うばかりです。

連続して二度に渡り駈けつけて頂き、作業を主導してくださった植平さんに深くお礼申し上げます。又、ハシゴや工具を準備して「早くやれ！」と背中を押してくれた児嶋、梶野両氏にもお礼申し上げます。

六、下北山村不動峠地蔵堂再建資材荷揚げ協力と落慶記念式典

周辺近郊の山に登ると、山の神様、祠やお地蔵さまに必ず出会うことがあります。しかしいずれも長年お参りもされず、朽ちかけて藪に埋もれている物も多くなっています。下北山村の不動峠地蔵堂も同じで、後方に大きく傾きお堂が倒壊寸前になっていました。このお堂は２５０年前に建立されたもので、地元の方々が修復保存会を立ち上げ、再建にスタートを切りました。当ぐるーぷにも資材の荷揚等の協力要請があり、１０月１８日に１２名で建築資材の荷揚、１１月１５日の竣工落慶式には１６名が参加しました。式は総勢８０名を越える出席者の盛会でした。今後もこの種の行事には積極的に参加、協力したいと考えています。普段活動の拠点としている地域の皆さんとの交流を大いに深めることが出来ました。

七、前鬼・小仲坊裏行場等整備ボランティア

小仲坊の五鬼助さんは週末、雨の日も風の日も休むことなく前鬼に出向き、坊の維持管理や接待等に努められています。当ぐるーぷ会員同様に年を重ね体力的に困難な作業も増えてきました。そこで当ぐるーぷから7回、延３２名が出向いて周辺の整備などの協力をしました。作業内容は

◎三重の滝登山道の倒木処理と道標設置

◎黒谷左岸登山道（ゲート横吊橋から小仲坊までの旧道）整備

◎水源と導水ホースの補修

◎行者堂の大掃除

釈迦ケ岳以南の大峰に関わる我々としては今後も前鬼の存続に協力できることはやっていきたいと思います。

八、植平普善行者、市居善導行者の奥駈行ご接待

本年は新型コロナウイルスに終始し、例年なら何組かの教団奥駈行の接待に出向いていましたが、今年は全てキャンセルとなってしまいました。そんな中、個人的な奥駈行は許されたようで、私が知る限りでは二組３人が吉野、熊野間を歩かれました。植平さんと市居さんはそのうちのお二人で、7月に逆峰修行を実行されました。せめて行仙宿で白湯のみでも、と思い接待をさせて頂きました。事前に入山日、下山日の日程をお聞きしたが、今年の梅雨が異常に長く続き、予報では日程の全てに雨マーク　が付いていました。

本宮へ下山して満行かと思っていましたが、本宮～大雲取・小雲取を歩き、那智山から新宮までも歩かれ、奥駈道と熊野三山全てを歩き通されました。１２日間で晴は一日だけ、新宮市内でお二人の到着を出迎えましたが、法衣と地下足袋の汚れ方は行の厳しさを物語っていて、並みの行者さんではないことが判りました。

九、平治宿水場径の改修に着手

平治宿の水場径は平成２３年１０月６日～7日に一泊で医療法人やまびこ会と同会関係者の皆さんのご協力を頂き、総勢１６人で改修を施しました。しかし途中通過するガレた沢（約２０ｍ）が荒れて、日を追うごとに歩きにくくなってきました。転倒のリ

スクが増してきたので、この沢部分を迂回するルートを造ることになり、今秋大まかなルート設定を行いました。距離は長くなりますが、歩きやすく安全な道にしたいと考えています。来年度のメイン行事となりますので、多くの皆様のご協力をお願いします。

十、行仙宿小屋東側の窓に雨戸設置

玉岡相談役には常々我々の活動について大所高所から指示、アドバイスを頂いています。今回の雨戸設置についても建設後３０年以上経過して東側斜面の倒木などで小屋に当たる風が強くなっている、台風などの悪天候で飛ばされた枝などが窓に当たる可能性があるなど、雨戸の重要性を説かれ、何度も雨戸設置を伝えられました。

雨戸設置に先立って、採寸や工事準備を行い、分解した雨戸を荷揚げし、９月２６日～２７日に設置工事を行いました。木下棟梁と脇浜サッシ店の２名にも同行いただき、４時間で完工しました。

当初は「今まで何も問題は無かったし、大丈夫なのでは？」との声もありましたが、取り付け工事の際、外壁トタン内側の胴縁などに腐食が見つかりました。窓枠サッシの隙間から入った雨水が下に伝い落ち、窓下の柱や胴縁に大きな腐食がありました。一部にはアリが巣を作った形跡もあり、腐った部分を切り取って新しい材木で補修しました。雨戸の設置工事が無ければ、これらの腐食は見つからず、後々建物の変形に繋がっていたかもしれません。玉岡相談役からは他にもいろいろな指示・注文があるが、可能なことから実現する方向で努力していきたいと思います。。

最後に、令和２年の行事遂行に皆さんには格段のご支援、ご協力を頂き、厚くお礼申し上げます。今年はコロナに振り回された一年でしたが、来年は「コロナ」のフレーズを使うことが無くなるように祈っています。

皆様方には次年度においても同様のご支援、ご協力をお願い申し上げます。

（文責　沖崎）

訃報

新宮山彦ぐるーぷ副代表　山上晧一郎は令和２年１２月１５日、９２歳をもって永眠いたしました。

茲に生前のご厚情に深謝し、謹んでご報告申し上げます。

一々拝眉の上お礼申し上げるべきですが、今尚取り込み中につき取敢えず本書を持ってお礼申し上げます。

なお、通夜は１２月１６日、告別式は１２月１７日に家族葬にて相済ませました。

故人の遺志により香典の儀は固くご辞退申し上げます。

〒６４７―００８１　新宮市新宮７６４９

喪主　山上智英（長男）

妻　山上昌子

新宮山彦ぐるーぷ世話人代表　沖崎吉信